

〔第10号記念特集〕

日本ヤスパース協会の48年

林 田 新 二

1951年にヤスパース協会が創立されて以来半世紀近い時が流れ去った。本誌の第10号を記念して、私たちの記憶や記録から消え去りそうなこの間の主な「歴史」を、『実存主義』の記事などを頼りに整理しておこう。

ヤスパース協会の創立

1950年の秋頃、草薙正夫先生と鈴木三郎先生との間でヤスパース協会創立の話が出たのが協会創立の最初の具体的な動きであったようである。その後、この両先生に武藤光朗先生をも加えた三先生が草薙邸で会合されて協会設立の具体化が相談され、ここでの話し合いをうけて、1950年12月9日に「ヤスパース協会設立準備会」が京橋のメトロホテルで開催された。出席者（発起人——理事候補）は、上記三先生のほか金子武蔵、樺俊男、鬼頭英一、橋本文夫の諸先生であり、井上智行氏（現以文社社長）も書記予定ということで出席されている。この準備会の後同年12月中には、伊藤吉之助、務台理作両先生を顧問、金子先生を理事長とし、上記理事候補の諸先生に矢内原伊作先生をも加えて理事候補とするなどの役員（案）がきめられた。

こうした準備が整えられた後、1951年2月23日（ヤスパース誕生日）に、御茶の水の岸体育館で第1回総会が発会式をかねて挙行され、理事長以下の役員が確定してヤスパース協会が正式に発足した。この総会では、務台先生の「戦後ドイツにおける実存哲学の展開」と金子先生の「ヤスパース哲学の現代的意義」の二つの講演がおこなわれ、また、ヤスパースからの略伝つきのメッセージが披露されたことが特筆すべきことであろう（以上主として『実存主義』26号と37号との記事による）。

なお、協会発足に当たっては、草薙、鈴木、武藤の三先生が草薙邸で起草されたと言われる「趣意書」があるので、再録しておく。

〔ヤスパーズ協会趣意書〕

「実存主義は戦後我国思想界においても一つの流行である。それは敗戦後の頹廢した世相の中にデカダンスやニヒリズムと絡み合っ流れて込み、絶望、虚無、深淵というような言葉を我国の思想界にも氾濫させた。哲学においても文学においても、また社会科学においてさえも、いわゆるアプレ・ゲールはなんらかの意味で実存主義的に陰影づけられているかのように見える。しかしこの実存主義の流行が私達日本人の生活にどれだけ根を下ろしたものであるかという点になると、些か疑いなきをえないのではないか。いわゆるアプレ・ゲールが早くも世に飽きられて影を薄くしているという事実が示しているように、実存主義は一つの流行思想として戦後の我国思想界に慌ただしく迎えられ、そしてまた慌ただしく送り出されてゆくのではないかと思わせられるのである。しかし正しい意味の実存主義は、単なる流行思想として葬り去るには、その因って来る根源があまりに深い。それは人間の存在の窮極にある根源的自由に根ざす思想だからである。

東と西から迫ってくる国際的圧力のもとに、右へ左へ動揺常なき我国思想情勢の中にあって、私達の窮極において抛り所とすべきものは、私達自身の根源的自由にもとづく実存的交わり以外にはない。しかし、この立場に徹するためには、私達は目下流行の実存主義の底を突き抜け、窮極的なものを求めてどこまでも哲学することを試みなければならない。幸いにして私達は、このような試みの先達としてヤスパーズの実存哲学をもっている。ヤスパーズの実存哲学は、現代流行の実存主義の源泉の一つであるばかりでなく、根源的自由にもとづく真の自己として現代の精神的状況を生き抜くべき決意へと私達を駆り立てる点において、他に匹敵するものがない迫力をもっている。それにも拘わらず、ヤスパーズ哲学の真の姿は、その難解さの故もあろうが、我国思想界に充分に理解されているとは言えない。況んや彼の実存的決意を真に自己のものとするという試みは、切実な問題として意識されてさえいないと言ってよい。私達がここにヤスパーズ協会を結成したのは、我国のかかる思想状況に鑑み、実存哲学の研究を通じて私達日本人の実存的決意の深化に些か寄与したいと念願したからに他ならないのである。」（『実存』創刊号所収——『実存主義』37号に再

録されたものから)

発足当初のヤスパース協会の活動と『実存』の発刊

こうして発足したヤスパース協会の活発な活動は瞠目すべきものであった。記録によると、公開講演会として、発足の51年には東京大学で安倍能成先生と草薙先生とが講演されているし、翌52年には朝日講堂で辰野隆先生とシンチンゲル先生が、また53年には朝日講堂で務台理作先生と中村光夫先生が講演されている。研究会（例会）も開かれていて、51年には4月の研究会で鈴木先生が「ヤスパースの近著」について、10月の研究会では武藤先生が「ヤスパースの『歴史の根源と目標』」について報告されている。こうした研究会は、52年以降も毎年ほぼ2回開催されているし、52年の2月23日にはヤスパース誕生祝賀会も催されている。また協会の機関誌『実存』創刊号が51年の9月に刊行され、その第2号は同年12月に、第3号は52年6月に発行されている（主として『実存主義』37号による）。

51年に創刊された『実存』は第10号以降誌名を『実存主義』に変更して1985年の89号まで続いたし、また本協会の『コミュニケーション』の母胎であり、ある意味では現在の実存思想協会の『実存思想論集』のもとになったものとも見ることのできるものであって、その創刊は、我が国における実存思想の研究と普及にとって画期的な意味を持つものであったとすることができよう。この創刊号には、前記の「ヤスパース協会趣意書」と協会規約抜粋が掲載され、金子先生の「ヤスパース哲学の現代的意義」と題する論文などがあるが、特筆すべきことはヤスパース自身の寄稿文が掲載されていることであろう。わずか33ページの小冊子ではあったが、草薙先生は編集後記で、「協会発足以来約半歳にして漸く会報の第1号を会員会友各位にお届けできる運びになったことは悦びに堪えない。現在の協会の財政状態からして量において乏しい恨みはあるものの、この量の乏しさはこれを質において十分補って余りあるものと吾々は確信している」とされている（主として『実存主義』37号と50号による）。この創刊号に寄せられたヤスパースの寄稿を再録しておこう（『実存主義』48号での再録による——なおこの48号には、1952年の年頭に当たってのヤスパースの「日本の友に寄せる年頭の辞」も、『実存』3号から再録されている）。

〔ヤスパース協会に寄す〕

「親愛なる同学諸賢！

諸賢が日本において日独両国民の由緒深い思想的な連繫を引きつがれ、この連繫を同時代の哲学的思索の一表現たる私の研究労作と結びつけようとしていられるのは、私の甚だ名誉とし、喜びとする所である。

世界の情勢は今や政治的にも、はた精神的にも、一変している。哲学の任務は時代のなかにあつて時代を超えたものであるが、哲学はまだこの情勢に即応していない。我々の考え方は19世紀の科学的な形式に嵌まり過ぎている。由緒ある古代の哲学に関する外面的な知識は哲学史的には著しく高まったけれども、その偉大さは科学的な形式の蔭に隠れて、さながらヴェールに包まれている。我々の共通な任務は、第一には、源泉をつきとめ、現代的な根源に立脚して古代哲学の本質的な意味を再認識し、第二には、ヨーロッパの哲学、インドの哲学、東アジアの哲学から世界哲学への道を発見することだと思ふ。

単なる知性の無味乾燥な言語で表現されるあまねく承認された真理のもつ一般性へおちいることなくして諸々の歴史的な源流が相会するとき、その時始めて世界哲学が生き生きとしたものになるであろう。むしろ歴史的な多様性のなかから一個の共通の真理の国土が顕現するであろうということを期待することができる。この国土は完結した体系としては、いずれにせよただ一つの体系としては現れ得ないであろう。誰一人把握しているものもない真理で、しかも誰もが求めようとする真理を探究する精神的交流のうちにのみ、この国土は現われ得るであろう。

私は、我々の本能的な念願が一致することを期待し、御挨拶かたがた諸賢の御事業の成功を切に祈る次第である。

1951年2月1日

バーゼル（スイス）、アウシュトラレーセ126番地

カール・ヤスパース 』

ヤスパース協会と実存主義研究会と実存主義協会

ヤスパース協会の『実存』は、51年の創刊以来53年3月に第4号（「ヤスパー

ス教授生誕70年記念」の号) が発行された後、第5号の発行はやや遅れて54年の4月になった。発行の遅れに象徴される事態、金子先生が「5号の出た〔昭和〕29年〔1954年〕頃が第1回の危機ではなかったかと思う」と回想されている事態に対処して、「より広く同志と読者を求める」ために、ヤスパース協会と併存して「実存主義研究会」が設立され、『実存』の編集と発行はこの研究会が行うことになり、55年には『実存』の第6号、7号、8号が発行され、それぞれの合評会も行われるなど、活動が活性化された。しかし、55年11月に第8号が発行された後、第9号の発行は56年の10月になってしまい、金子先生は「本誌は再び廃刊の危険にさらされた」と回想されている。この危機を乗り越えて協会と機関誌の存続を図る道が模索された結果、たまたま「キルケゴール協会」からの協力の申し出があったこともあって、実存主義研究会は1957年に「実存主義協会」に改められ、誌名も第10号から『実存主義』に変更された(以上主として『実存主義』26号による)。誌名の変更の趣旨について、編集長の飯島宗享先生は第10号の編集後記で「改題の趣旨はこれまでよりも幅を広げて、我が国で一般に実存主義と称せられている思想的風潮に正しい筋を通しながら、狭義の哲学に限らず文芸その他の分野にもみられる実存思想一般の共同の活動舞台にまでこの雑誌をもっていこうとする野心でした」と述べられている(『実存主義』50号の吉沢伝三郎先生の編集後記による)。この『実存主義』誌は、第10号から58号までは理想社から、第59号から89号までは以文社から発行された。

こうしてヤスパース協会は実存主義研究会を経て実存主義協会になって1985年まで存続することになるのであるが、この際留意すべきことは、その母胎であったヤスパース協会が消滅したわけではなく、実際上の活動のほとんどすべては実存主義研究会ないし実存主義協会としてなされていたにもかかわらず、ヤスパース協会がそれらと「一体運営の形で」(鈴木先生の言葉) 存立していたものと解されることである。このことは、実存主義研究会との関係で言えば、この研究会の発足に関する金子先生の回想での「ヤスパース協会と併存しつつ実存主義研究会を設立し……」という言葉(『実存主義』26号) からしても、また『実存』第6号の後記での、『実存』は「〈実存主義研究会〉と〈ヤスパー

ス協会〉との共通機関誌として面目を一新して再出発することになり、……」という文面（『実存主義』37号の再録による）からしても明らかである。

この事情は、実存主義協会との関係においても同様であって、そのことは、この協会の理事長が金子先生から小倉志祥先生に代わったことを報告する文面に「なお、実存主義協会とは一応独立に存続しているヤスパース協会の方は、従前通り金子武蔵理事長のままです」（『実存主義』68号編集後記）とされていることから明白なことであろう。1963年の「ヤスパース生誕80年祝典」に参列して「ヤスパース協会とわれわれ個人とからの記念品の説明など……」をされたという草薙先生の文面（『実存主義』48号）や、1968年の実存主義協会理事会の「ヤスパース病気につき、ヤスパース協会として見舞い状を出す件（武藤理事が作成、柿原篤弥氏に独訳依頼）」という吉沢伝三郎編集長の記録（『実存主義』62号）や、1974年5月に G. Jaspers マイヤー夫人の逝去が「ヤスパース協会橋本文夫」宛てに届けられ、「ヤスパース協会（理事長金子武蔵ほか理事一同）代理・橋本文夫」の名で弔詞を打電したという記録（『実存主義』39号）なども、ヤスパース協会の存続を証するものである。

なおこの実存主義協会は、1985年7月発行の『実存主義』第89号に小倉理事長の「実存主義協会改組のお知らせ」を掲載して、「発足以来30有余年に亙る活動の歴史に一旦終止符を打つことに」なったことを知らせるとともに、「実存思想協会として発足する」ことが予告され、実際に同年11月には実存思想協会の第1回大会が早稲田大学で開催され、また同協会編集の「実存思想論集」も刊行されて今日におよんでいる。

再発足した日本ヤスパース協会

1951年に創立されたヤスパース協会を含む形で活動してきた実存主義協会は、1978年までは季刊の『実存主義』をほぼ1年4回のペースで刊行してきたが、79年から81年までは1年に1冊のみの刊行となり、81年3月にその88号を刊行した後は、予定していた89号の刊行が85年7月まで実現できず、それに応じて協会そのものの活動も甚だしく沈滞せざるをえない状態であった。実存主義協会の活動が著しく低下していた1982年から84年の間に、この協会の中に吸収されていたヤスパース協会を独立したものとして活性化しようとする動きが出て

きた。この動きの中心となって実際に日本ヤスパース協会を再発足させられたのが、今は亡き鈴木三郎先生であった。

ヤスパース協会を日本ヤスパース協会として再発足させようとするこの動きが、第2次大戦中からのヤスパース研究の泰斗として、ヤスパース哲学研究の深化とその思想の普及を熱望されてきた鈴木先生の熱意によるものであることは言うまでもないが、1982年から83年にかけての海外での国際的なヤスパース研究の動向が、この熱意と協会再発足の動きを駆り立てた大きな要因であったことも確かである。即ち1983年はヤスパース生誕100年の年に当たり、バーゼルとハイデルベルクでは「ヤスパース生誕100年記念シンポジウム」が、またモントリオールでは第17回世界哲学会議の枠内で「国際ヤスパース会議」が開催されることになっていた。この二つの国際的なヤスパース研究の会合に関する情報ないしはそれへの参加の要請・招待が、H. ザーナー博士やK. ザラムン教授やR. ヴィッサー教授から、更にはアメリカのL. H. エールリッヒ教授から、草薙先生や川原栄峰先生や福井一光先生や上妻精先生を通じて、82年中にヤスパース協会の主なメンバーに齎されていた。実際に前者のシンポジウムには鈴木先生が招待に応じて参加されて「日本におけるヤスパースの全著作の翻訳書並びに研究書の総目録」を配布されたほか、福井、宮坂、林田の諸氏も参加しているし、後者のヤスパース会議には吉沢先生が「日本ヤスパース協会」の代表として「日本におけるヤスパース受容」と題する報告をされている（詳細は本誌での吉沢先生の「第1回国際ヤスパース会議の思い出」参照）。日本ヤスパース協会の再出発が、こうした国際的な動向に触発されたものでもあったことは、鈴木先生の「右の〔バーゼルとハイデルベルクでの〕シンポジウムに刺戟された本協会の再興活性化……」という文言（『コムニカチオン』2号巻頭言）によっても明らかである。

このように1983年中に国際的なヤスパース研究に参加し実質的な活動をしていたヤスパース協会が、新たな組織と体制を整えた「日本ヤスパース協会」として正式に再発足したのは、84年の3月23日であった。即ち、当日本郷の学士会館別館で鈴木先生を中心にしてヤスパース協会の理事会が開かれ、引き続き1983年度の「第1回日本ヤスパース協会総会」が開催され、金子、草薙両先生

を顧問とし鈴木先生を理事長とするなどの人事や規約などが決定されて、本協会が正式に再発足したのである。

こうして再発足した本協会は、ほぼ毎年2回の理事会と毎年12月（第1、第3回は11月）の大会、総会を開催して今日におよんでいる。機関誌『コムニカチオン』は、84年11月に創刊号が刊行され、その後第4号までは毎年度順調に刊行された。しかしそれ以後は、主として財政上の事情によって休刊せざるをえない年もでるようになった。第5号が89年1月、第6号が90年3月、第7号は92年11月といったペースで、つまりほぼ隔年に1冊しか刊行できないという実態に応じて、94年度には正式に隔年刊行とすることが決定されてこの第10号におよんでいる。

発足以来の本協会の活動のうち、特筆すべきことは、国際的なヤスパース研究への貢献と積極的な参加であろう。国際ヤスパース会議は、記述の83年の第1回に続いて、88年にはブライトンで第2回、93年にはモスクワで第3回、98年にはボストンで第4回のそれが、それぞれ世界哲学会議の枠内で開催されたが、本協会は、第2回以降は、北米ヤスパース協会、オーストリアヤスパース協会、バーゼルのヤスパース－シュティフトゥングとともに、この国際会議の共同主催者となり、立案委員を出すとともに、それぞれの会議で3名～6名の協会会員が研究発表を行ってきた。98年の第4回国際ヤスパース会議について言えば、本協会は、会議の運営資金の一部を負担して共同主催者となるとともに、その立案段階から羽入佐和子教授が立案委員として参画した。本協会からはドイツに次いで多数の6名の会員が研究発表を行ったが、R. ヴィッサー教授とL. H. エールリッヒ教授による「チーフオーガナイザー報告」という公式文書では、特別に日本からの発表者に言及して、その多くが「しっかりした研究者として、ヤスパース研究の“世界－哲学的な”課題を達成するための正当な途上にあることを、喜びと満足を持って知ることができた」と述べられている。なお現在、今後の国際ヤスパース会議のより円滑な推進のために、本協会を含む上記四つのヤスパース協会が国際的な「ヤスパース協会連盟」を結成しようとする計画が進められている。このいわば定期的な国際ヤスパース会議への参画のほか、1994年にグラーツで開催された国際カール・ヤスパース会議に

も7名の本協会会員が参加し、一つの講演と二つの研究発表を行っている（詳細については『コムニカチオン』8号参照）。また本協会は、1995年に仙台と東京で開催された「日独共同国際シンポジウム」を後援して、仙台では協会会員3名が講演し、東京（早稲田大学）では本協会の鈴木名誉会長が歓迎の辞を述べ、理事の数名が講演、司会などをおこなった（詳細については『コムニカチオン』9号参照）。

1984年のこの協会の再発足がヤスパース研究の国際的な動向に触発されたものであったことに象徴的に示されているように、また、本協会の再発足を祝う書簡が前記のザーナー博士やヴィッサー教授やザラムン教授から福井先生に届けられたこと（『コムニカチオン』2号）からも察せられるように、本協会のこれまでの活動の中心の一つがこうした国際的な研究への参画にあったことは明らかである。そして、現在進行中の世界的な「ヤスパース協会連盟」の結成計画などを思えば、唯一のアジアにおけるヤスパース協会、しかも世界で最も古い伝統を持つ日本ヤスパース協会が、こうした共同研究と国際的な対話への参画のために果たすべき責務は甚だ重いものがあるし、それだけにまた、将来にわたる本協会の存続の意義も大きいと思われるのである。

最後に、再発足以来の本協会の運営について付言しておこう。1988年前後における再発足の準備の間はもちろん、89年の再発足の当初は、鈴木先生が自宅に事務所を置いてほとんど独力で運営に当たられ、『コムニカチオン』誌の編集発行をも担当されていた。尤も、雑務面では当初は中島徹、宮坂万喜弘両先生のご協力があったと聞いているし、84年の第1回大会以後は徐々に早稲田大学の関係者が雑務を担当して下さるようになった。しかし、今日の日本ヤスパース協会の再発足とその当初における運営が、もっぱら鈴木先生の献身的な御尽力に負うものであったことは疑いがない。その後、より組織的な協会運営の必要に迫られるようになったため、1988年には事務所が早稲田大学に移され、佐藤真理人先生を中心とする早稲田大学関係の方々が一切の事務を負担して下さることになったし、『コムニカチオン』誌の編集には羽入佐和子先生を長とする編集会議が当たっているのが現状である。

（日本ヤスパース協会理事長）